

# 「歳時記」の真実

石 寒太



文藝春秋

## 石 寒太 (いし かんた)

1943 年、静岡県生まれ。本名・石倉昌治。70 年、「寒雷」に入会、加藤楸邨に俳句を学ぶ。現在、「炎環」を主宰。「俳句α あるふぁ」編集長。毎日文化センター、NHK 俳句教室講師。日本文藝家協会、近世文学会、現代俳句協会会員。著書に句集『あるき神』『炎環』、評論・随筆に『山頭火』『俳句日暦』『わがころの加藤楸邨』『宮沢賢治の俳句』などがある。

## 文春新書

143

### <sup>さいじ き</sup>「歳時記」<sup>しんじつ</sup>の真実

平成 12 年 12 月 20 日 第 1 刷発行

著 者 石 寒 太  
発 行 者 東 眞 史  
発 行 所 藝 文 藝 春 秋

〒102-8008 東京都千代田区紀尾井町 3-23  
電話 (03) 3265-1211 (代表)

印 刷 所 理 想 社  
付物印刷 大 日 本 印 刷  
製 本 所 大 口 製 本

定価はカバーに表示してあります。  
万一、落丁・乱丁の場合は送料小社負担でお取替え致します。

# 「歳時記」の真実

石 寒太

文春新書

143

カット  
コスギ・ヤエ

はじめに  
II

# 春

|                   |    |
|-------------------|----|
| 年内に立春がきてしまう、旧暦の矛盾 | 28 |
| 彼岸は極楽浄土、此岸は現世のこと  | 30 |
| 春のいかのぼりが、正月の風揚げに  | 32 |
| 落と落のとうは、同じものではない  | 34 |

よく梅に鶯というが、それは本当？<sup>36</sup>

災厄除けの雛が、豪華さを競うようになった<sup>38</sup>

梅と桜、どちらが日本の花なの？<sup>40</sup>

美しい桜鯛は、いったいどこに<sup>42</sup>

蝶は、本当に桜の花にとまるか？<sup>44</sup>

「古池や」の蛙は、いったい何匹？<sup>46</sup>

ぶらんこは、なぜ春の季語になる？<sup>48</sup>

笑い眠り、化粧する山の容<sup>50</sup>

気象用語で、春秋呼び方がちがう<sup>52</sup>

春秋が逆の季語になった、竹の不思議<sup>54</sup>

雁風呂って、いったいどこの国の風呂？<sup>56</sup>

春は長閑、秋は爽やかが天候の季語<sup>58</sup>

忘れないで！が勿忘草になった<sup>60</sup>

八十八夜は、立春から八十八日目<sup>62</sup>

## 夏

十日で竹の子、十日で竹になる<sup>66</sup>

唐獅子牡丹は、どういう組み合わせ？<sup>68</sup>

几帳面にみえて、ズル賢いホトトギス<sup>70</sup>

季語が三つも入っている、素堂の名句<sup>72</sup>

子どもの日は、女性の天下御免の日<sup>74</sup>

万緑の中の、紅一点の花はどんな花？<sup>76</sup>

シーボルトが名づけた、紫陽花の学名<sup>78</sup>

五月晴は、梅雨の間の晴天をいう<sup>80</sup>

薬草と毒草と、ふたつある半夏生の花<sup>82</sup>

山寺の蟬は何蟬で、何匹だった？<sup>84</sup>

胡瓜は青ではなく、黄色かった<sup>86</sup>

西瓜割りは夏、西瓜は秋なのはなぜ？ 88

雷さまが臍をとるって、本当なの？ 90

ビールは夏、枝豆は秋の不思議 92

滝はまっすぐに落ちず、垂れるもの 94

源平合戦が、蛍川に変わるまで 96

浴衣は入浴の衣、行水は禊の行だった 98

花火は鎮魂のための、秋の行事 100

声は悪いが、姿が美しい仏法僧 102

土用の丑に、鰻を食べるのはなぜ？ 104

いろいろな諺にされ、伝えられている茄子 106

## 秋

お盆は、母を救う優しい子の心に由来 110

朝顔は、どうして秋の季語になったのか<sup>112</sup>

秋の七草は、いったい誰が決めたの?<sup>114</sup>

バナナが好きで、俳号にした芭蕉<sup>116</sup>

野分の句を、四回も推敲した芭蕉<sup>118</sup>

「柿くへば」の鐘は、東大寺の鐘?<sup>120</sup>

鶏頭は、何本がふさわしいか?<sup>122</sup>

ホトトギスを俳号にした、結核の子規<sup>124</sup>

黄葉は奈良時代、紅葉は平安時代から<sup>126</sup>

神につかえる鹿が、突然人を襲う<sup>128</sup>

菊花展に添える、俳句をつくった賢治<sup>130</sup>

中国から、オスの木犀だけが伝わった<sup>132</sup>

四季ありながら、なぜ月は秋か?<sup>134</sup>

「カリ」が、「ガン」に代わったわけ<sup>136</sup>

赤蜻蛉は、はじめから赤くはなかった<sup>138</sup>

はかない夢からつけられた、虫の邯鄲<sup>140</sup>

雷は夏なのに、なぜ稲妻は秋なのか？<sup>142</sup>

萩は、生え芽から名づけられた<sup>144</sup>

俳人は、亀も蓑虫も蚯蚓までも鳴かす<sup>146</sup>

露は、はかないものの代表となった<sup>148</sup>

## 冬

芭蕉の忌日は、なぜ時雨忌というのか<sup>152</sup>

木枯らしは、冬の吹きはじめの風<sup>154</sup>

小春は、春が蘇った温暖な冬の日<sup>156</sup>

親の喜びの七五三が、親の見栄に<sup>158</sup>

死後の世界を夢見て、帰り花は咲く<sup>160</sup>

酉の市では、なぜ熊手が売られるの？<sup>162</sup>

季節によって変わる、酒の飲み方<sup>164</sup>

山茶花は、茶の代用の山の茶の木<sup>166</sup>

種なしみかんが、嫌われた江戸時代<sup>168</sup>

鉄砲鍋って、いったいどんな鍋？<sup>170</sup>

「生のコ」だから海鼠、腸はコノワタ<sup>172</sup>

エジプトのピラミッドに、記述がある大根<sup>174</sup>

すき焼きは、なぜ日本に普及したか？<sup>176</sup>

関西と関東で、食べる部分がちがう葱<sup>178</sup>

雪国の人には、雪はいまishいもの<sup>180</sup>

風花って、本当はどんな花？<sup>182</sup>

出世魚の季語は、どう変わるのか？<sup>184</sup>

水仙は、海岸にひっそりと上陸した<sup>186</sup>

十七音より、ずっと長い季語<sup>188</sup>

左ヒラメの右カレイ、という見わけ方<sup>190</sup>

# 新年

除夜詣と初詣は同じか、ちがうか？ 194

地方によって、材料・調理法がちがう雑煮 196

門松は、むかしは松とはかぎらなかった 198

元日草といわれ、喜ばれる福寿草 200

屠蘇ってどんなもの、どんな味？ 202

初夢とは、何日に見る夢のこと？ 204

春の七草は保健食、秋の七草は観賞用 206

なぜ橙が、新年の季語になるの？ 208

あとがき 210

初句索引 212

参考文献 214

## はじめに

### 暮らしと歳時記

「歳時記」といえば、いまではとくにことわらなくても、俳句の歳時記のことを指していますが、歳は年、時は季節、つまり、歳時記のもともとの意味は、文字どおり、一年の季節の移り変わりを記したものでした。季節に応じた祭事・儀式・行事・自然現象などを解説した本が、歳時記です。

誰でも知っている立春・啓蟄・春分・立夏・夏至・大暑・立秋・白露・秋分・立冬・大雪・冬至・大寒など、いまでも日常の中で使っている季節の言葉は、すべて中国の二十四節気の分類に従っているものです。これらは、中国では古くから歳時記に記されていました。

日本で、俳句以前の俳諧の時代に、「季寄せ」や「俳諧歳時記」と呼ばれていたのは、季語のみを整理、分類した書物です。近代になってはじめて、「歳時記」といえば、季語と例句を

集めて、春・夏・秋・冬・新年に分類、配列し、これに注釈を加えた書物のことを指すようになったのです。

季語は、日本の風土の中で、われわれの祖先の生活によって育はぐまれたものです。四季折々の優しくゆかしい言葉のひとつひとつが、季語として結晶したのです。その季語は、長い歴史の中でみがかれながら、受けつがれてきました。そして、いっしか私たちの生活の中に根づき、深く滲しみこんでいるのです。

先達たちは、これらの四季の風物や行事、そして自然の山河を、和歌や俳諧など、さまざまな詩歌に詠うたいつづけてきました。詩に残すことが、生きる証あかしであった、といってもいいかもしれません。

わが国では、『延喜式』以来、歳時記に記されたのは、年中行事でした。平安末期の「年中行事絵巻」は、朝ちよう観かん行ぎよう幸かうをはじめ、主として宮中行事を描いて、行事の規範として伝わってきました。

季語の歴史をさかのぼると、古くは『万葉集』にまでゆきあたります。そして、平安時代の和歌、室町時代の連歌の中で育ち、次第に定着してきました。はじめは、いわゆる雪月花せつげっかを中心とした、和歌的な優雅な事物が多くありました。その中で、日本人だけの詩情をつくりあげ、やがて俳諧の誕生をみたのです。

和歌が宮廷を中心に雅の世界を求めてきたのに対し、俳諧は庶民を中心に、そのエネルギーによって俗の世界をひろげてきました。やがて俳諧独自の歳時記ができ、季語の数もふえつづけ、解説もどこされ、世の中にひろまっていたのです。

そして、とうとう、歳時記といえば「俳句歳時記」を指すほど、代表的な書物になったのです。いまや「俳句歳時記」は、一般の俳句愛好者だけでなく、日本を愛する万人の書として、バイブルのごとく普及しているのです。

### 季語の分類と歳時記

季語といえは、季節の詞ことばです。では、みなさんは季題という言葉聞いたことがありますか。季語も季題も、その呼び名そのものは、明治末期から盛んに使われだしたもので、それほど深い歴史のある言葉ではないようです。

ただ、「四季の題」などという呼び名が古くから使われ、題詠などという言葉も使われていますから、季題と呼ぶほうが正統だろう、などと漠然と考える人が多いかもしれません。が、いまは季語という呼び名のほうが、一般的にひろくゆきわたっています。

ともかく、誰からも認められた、四季の美を代表する題目が季題、まだ、その段階にいたらず、言葉として生のままのものが季語、そんなふうに考えておいたらいいでしょう。が、俳句

実作のうえでは、あまり呼び名にこだわることもないでしょう。

さて、近代になって、本格的に俳句の分類にかかわったのは、俳句革新を断行した正岡子規<sup>しき</sup>です。子規は俳人でもあり、歌人でもありましたが、明治三十四年（一八九一）の年の暮れに、「俳句分類」の仕事に着手しました。古俳句を季別、事物別に分類する作業を通して、「美術文学」の概念の、俳諧的な結実を見定めようとしたのです。

子規は、明治二十七年（一八九四）、中村不折<sup>ふせつ</sup>に会い、「写生」を教えられ、イタリアの画家フォンタネージが美術学校で指導した描写の方法を間接的に知り、俳句に生かそうとします。二十九年から三十年にかけて、写生の実りとして「印象鮮明」の句風が新しくかたちづくられ、この歩みと並行して、画家でもあった俳人・蕪村の再評価をしたのです。

子規の文学は、一言にしていえば、「写生の文学」です。この傾向は、晩年にいたるまで一貫していました。技巧を去り、理想を排し、趣味を否定し、ひたすら実感、実情、実景を直写することでした。これは、リアリズムの提唱でもありました。「俳句分類」も、その中のひとつの作業だったのです。

明治になると、社会生活が発展し、変革に応える新しい歳時記もいくつか編まれました。その一方で、子規は、俳句革新運動の重要な基礎となる、「俳句分類」の大事業を、病床の身で推し進め、これが、歳時記に「例句」を掲げるための、大きな役割を果たしたのです。

子規の俳句結社について、俳句を大衆にひろめたのは、いうまでもなく高浜虚子<sup>たかはまきよし</sup>です。虚子もいろいろな仕事を推し進めましたが、そのもっとも大きなもののひとつは、『新歳時記』です。これは、昭和九年十一月、初版が発行されました。これが、昭和の歳時記の、決定的な模範となったのです。改訂が昭和十五年、そして増訂が二十六年、とつづいて刊行されました。この歳時記は、江戸時代からの歳時記の特色であった、年中行事考証などを省略し、俳句実作に適した、実例句を中心に編まれたところに、大きな意味がありました。果たして、この歳時記は、俳句実作者はもとより、俳句に興味ある、あらゆる人々に受け入れられることになったのです。そして、その後、続々と出版される、同じような歳時記を尻目に、一大ロングセラ―となったのです。

虚子がこの歳時記でめざしたものは、いったい何だったのでしょうか。それは、いままでの行事的な歳時記とちがって、文学的で、作句本位の歳時記をつくることでした。つまり、俳句の季題として、詩<sup>ポエジー</sup>のある文学をめざし、その他のものは、すべて捨て去ったのです。例句も、新題は、詩的で文学的価値のあるものに絞ったのです。つまり、季題を文学として高めた、そこに虚子のねらいがあった、といってもいいでしょう。

季語は定まったものではありません。誰かがいい俳句を詠めば、新しい季語として採用され、時代にそぐわなくなった季語は淘汰されます。江戸時代の芭蕉は、「季節（季語）」のひとつも